

日本総研では、未来に関する情報を自らの視点で統合し、新たな可能性を探察していく「未来洞察」という方法論を活用して、企業の戦略策定やビジョン策定などを行っているが、今回は新規事業開発への活用用途として、その具体的なプロセスと内容をご紹介します。

フレームとしては、未来に関する情報を検討テーマに直接関係しそうなものにとそうでないものとの二種類に分けて扱い、それらを複合的な発生要素として考えること

明日への力

日本総合研究所

リサーチ・コンサルティング部門
シニアマネジャー 鈴木 麻美子

②



で、これまで考えてもみなかったような新たな可能性への着想を得るというものだ。ここでは先月、技術系の大学院生を対象としたワークショップセミナーでの実施事例をもとに、具体的にどのようなアウトプットが得られるのかを見ていただく。新たな価値創造」を課題に大学院生が取り組んだのは、一〇年後を想定した「家事の未来」というテーマであった。

「未来イシュー」で家事の線形未来を考える

最初のステップでは、デスクリサーチや

思いがけない着想を得る「未来洞察」

ヒアリングなどをベースに対象となるテーマ、すなわち家事が今後どのように変化していくのかを考える「未来イシュー」の設定を行う。ここでは、家事領域の構成要素に着目し、そのうちの「何」が変化するか(主語の部分)、それらが「どのように」変化するかを、現在までとの対比の中で明らかにしていった。家事の未来では以下の四項目を未来イシューとして設定した。

- ・家事の担い手が、「女性／一人」中心から、「男も女も／外部支援併用」へ
- ・家事の注力対象が、「掃除・炊事・洗濯などのモノ」から、「育児・介護・

近所づきあいなどのヒト」へ

- ・家事の手段が、「省力化」から「自動化・自律化」へ

- ・家事を行う時間帯が、「朝・夕」中心から、「それぞれのライフスタイルに合わせて都合の良い時間」へ

「スキミング」で想定外の未来を考える

次のステップでは、世の中の多種多様なニュース記事の中から未来の変化を示唆していると思われる事象を見つけていく「スキミング」と呼ばれる方法で、当該テ

最後にこれら二種類の未来変化の仮説を併せて、新たな商品・サービスやビジネスのアイデアを考えていく。通常では接点をもたないような要素同士を強制的に組み合わせることで、思いもよらなかったアイデアにたどりつくことを可能にする。

最終的にセミナーで出されたアイデアのうちの一つは、「失敗を手本で見せてくれる育児支援ロボット」。「家事の対象は、モノからヒトへ」という未来イシューに、想定外の「不完全が良しとされる社会」を掛け合わせたものである。共働き家庭の増加を背景に育児支援ロボットを描いたものだが、単に正しい回答を示すだけでなく失敗も手本として示すことで、人間的な教育支援を実現したいという内容だ。

スタート時には、家事といえば掃除、洗濯、つまらないものや口々に語っていた学生たちが、今後の可能性としての育児や、不完全さに潜む人間らしさといった気づきを得て、最後には楽しそうに家事の未来の可能性をプレゼンテーションしていたのが印象的だった。この点からは、未来洞察はアイデアの生成そのものだけでなく、考える側に重要な、既成概念にとらわれない視点の転換や自由な発想を促す方法としても有効活用できると考えている。

マ以外の領域における「想定外」の変化の可能性を考えていく。テーマには直接関係しないと思われるような事象も、未来においては何らかの形で影響を与えるかもしれない、さらにそれを機会として取り込むことで新しい可能性が広がるかもしれないというのがこれらを取り扱う際の前提になる。セミナーでは以下のような想定外の変化仮説が創出された。

- ・家やアイデンティティを固定しないノマド生活
- ・完全よりも不完全が良しとされる社会
- ・あえて無駄を楽しむ社会

線形未来×想定外未来で新たな可能性を見出す